

2023年8月24日.

T.Kobayashi

都電13番の旅 <復刻版>  
新宿から万世橋まで 歴史と今を歩く

江東区の古い景色を集めた写真集を見ていたら、巻末に昭和32年発行の東京都交通局の「電車案内図」が載っていた。都電の路線は1番から41番までであった。図を隅から隅まで見入っているうちに、牛込北町に住んでいる頃のことを思い出した。

外濠の市谷田町から坂を上った中腹のような所にある牛込北町は下町のような所だった。交差点のすぐそばに住んでいたのも、大久保通りに出るといつも都電が走っていた。四谷見附のような大きな交差点ではないので、都電の停留所には安全地帯の島はなく、路面から乗り降りするようになっていた。乗客は道端のお店の前に立って待っていて、都電が来ると道路へ出て乗る。車が走ってきても、度胸よく道路を横切らないと乗り遅れてしまうので、引っ込み思案の人は大変だった。

走っていたのは13番の都電で、新宿駅と万世橋を結ぶ路線だった。あの頃を思い出しながら、あらためて新宿駅から万世橋までの旅を試みることにした。

\*表記の説明＝**停留所名**（都電の車掌が言っていた停留所の補足名）【ふりがな】

### 新宿駅【しんじゅくえき】

いつも賑やかな、そしてちょっと怪しい歌舞伎町の賑わいを目の前にしたところが「新宿駅」。紀伊國屋へ立ち読みに行ったり、武蔵野館・京王名画座・日活名画座などへ映画を見に行く時には13番の電車の世話になった。

新宿駅から出る都電は他に11番（月島通八丁目行）、12番（両国行）があり、また大ガードの向こうからは、14番（荻窪駅行）も出ていた。銀座通りを通り抜ける11番、神田を抜けて両国へ行く12番には行先を表わすイメージが感じられたが、13番にはどことなく生活の臭いが感じられた。

### 角筈【つのはず】

停留所から線路が分岐して、角筈車庫とつながっていた。近くには花園神社があり、正月やお酉様の時にはかなり混雑した。江戸時代には角筈村と言ひ、戦国時代には存在した地名のようで、いかにも深い由来がありそうな気がするのだが、残念ながら多説あってはっきりしないらしい。

### 四谷三光町（伊勢丹裏）【よつやさんこうちょう】

都電の線路を横切る道には、渋谷と池袋とを結ぶトロリーバスも走っていた。この道は車の通りも多く、トロリーバスの独特な臭いと厳つい車体、直進と左折する都電とで複雑な信号の交差点だった。都電とトロリーバスの架線が縦横に走りその上に電線が張り巡らされ、中空を見上げて一風変わった景色だった。現在は新宿五丁目交差点という何の味もない名前になってしまった。

角筈の花園神社は江戸の総鎮守として崇められていたが、寛永年間に朝倉筑後守の下屋敷の中に入ってしまった、町民が拝むことができなくなってしまった。幕府に訴えたところ現在の地への移転となった。この場所は尾張徳川の下屋敷の一部で、庭にきれいな花が咲き乱れていたことから「花園稲荷神社」と呼ばれるようになった。のちに真言宗豊山派愛染院の別院である三光院が合祀されて三光院稲荷とも呼ばれるようになった。明治に入り廃仏毀釈政策により花園神社だけが生き残った。トロリーバスと都電が並走する明治通りの西が花園町、東が四谷三光町となった時代があったのはこんな経緯が関係しているらしい。しかし、新宿五丁目・六丁目などという地名にしてしまうと歴史も由来も見えなくなり意味不明な町になってしまう。

13番はここを左折して、暫くはトロリーバスと並走する。先ほどまでの新宿の喧騒からだんだんに離れて行くのがよくわかる。

### 新田裏【しんでんうら】

およそ新宿の街には似つかわしくないような田舎っぽい停留所の名前だ。現在の地図で見ると新宿六

丁目交差点と名が付いている。この辺りは内藤新宿の新規開発地（新田）だった。

並走していたトロリーバスと分かれて右折する。右折した途端に石畳の路面を走る電車は、左右の車道とは別の場所を走るようになる。そして周囲の景色も変り、平屋の家並みが並ぶ田舎っぽい風景になってしまう。新宿という騒々しい町の中にこんな景色もあるのかと驚いた。停留所で乗り降りする人が皆「心優しい田舎のおじさん・おばさん」に見えるから不思議だった。

### **大久保車庫【おおくぼしゃこ】**

新田裏からのんびりと走ると程なくして大久保車庫に到着。東京都交通局の電車車庫になっている。多くの場合ここで運転手や車掌の交代が行われるため、乗客は乗ったままで待たされた。

大久保車庫を過ぎると軌道の石畳がなくなり、普通の鉄道のように枕木の上の線路を走る。左右に車体を揺らして、線路脇の貸家の軒先の洗濯物が風で揺れるのを見ながら走るのは風情があった。

真夏には、思いがけず窓の開いた家の奥にステテコ姿のおっさんや下着姿の女性が見えたりしてドキッとしたことがある。まだ世の中にエアコンが登場しない頃の夏らしい景色だった。

### **東大久保（抜弁天前）【ひがしおおくぼ】**

少しの上り坂を上ると再び敷石のある一般道路（大久保通り）になり、東大久保の停留所に停まる。車掌のアナウンスは「次は～ひがしおおくぼ、ぬけべんてんまえ～」。中には「しがしおおくぼ」と言う車掌もいたが、誰も笑いもしなかった。

東大久保から筑土八幡前までは安全地帯がない停留所が多かったように覚えている。

にわか買い物姿のおばちゃんたちが乗り降りするようになるのもこの辺りから。

抜弁天は、大久保通りの停留所の南側にある巖嶋神社。境内が南北に抜けられるようになっていることからこの名がついた。応徳3年(1085年)、源義家（八幡太郎）が後三年の役で奥州を平定に出かける時にここに宿営した。富士を望む高みから安芸の巖島神社に戦勝を祈願した。無事戦果を得て帰る途中で再び立ち寄り戦勝の礼として神社を建立して巖島神社を勧請した。

### **河田町（女子医大前）【かわだちょう】**

東京女子医大病院の北側になる。東大久保の下駄履きの雰囲気とはちょっと違う雰囲気になる。

かと言って、美しい女子大生に出会った記憶もあまりない。1908年（明治41年）に東京女医学校付属病院（現在の東京女子医大病院）ができたことに始まり、「女子医大前」と呼ばれるようになった。

### **若松町（国立第一病院前）【わかまつちょう】**

国立第一病院から来る道を左から合わせる。町は一変して生活臭が強くなってくる。先ほど東大久保から前掛け姿で買物籠を持って乗って来たおばちゃんが降りて商店街に吸い込まれていった。

戸山町方面へ入る道を進むと国立第一病院と総理府統計局があり、朝晩は通勤客などで行列ができた。明治元年（1868年）に「兵隊仮病院」ができたのが始まりで、のちにこの地の尾張徳川家下屋敷跡に移転して東京陸軍病院となった。その後も何度かの改称を経て昭和20年(1945年)に国立第一病院となり、現在は「国立国際医療研究センター病院」と言う。

### **牛込柳町【うしごめやなぎちょう】**

若松町を出てからしばらくは平坦な原町の家並みを通り抜けた後で長い坂を下る。坂の名前は焼餅坂（正式名：赤根坂）と言い、谷底に牛込柳町の停留所があった。坂の途中で焼餅屋があったことが坂の名の由来らしい。再び急な坂を上っていき山伏町に向かう電車は喘ぎながら上っていた。東京に大雪が降った時、私が乗っていた旧型車両の電車が坂の途中で車輪が空転して動けなくなり坂下まで滑って戻ってしまうという事件に遭遇した。後からきたやや新型の車両が尻を押す形で坂を乗り切った。都電の重連運転という珍しい体験をしたのだが、あの頃はカメラなど持ち歩いてはいなかった。

都電もなくなり自動車の時代に入ると、すり鉢の底のような地形の牛込柳町は排気ガスが滞留する場所となり、モータリゼーションの被害の町として有名になった。

交差点を右に曲がると大日本印刷や自衛隊を抜けて市ヶ谷へ出られる。また左に曲がると、鶴巻町を経て早稲田方面が近く、便利な場所だった。坂の途中には牛込名画座という古い良い映画をやっている映画館があり、しばしば下駄履きで通った。

### 山伏町（市ヶ谷小学校前）【やまぶしちょう】

停留所は市ヶ谷小学校の正門前にある。吊革につかまって外の景色を眺めていると、煉瓦作りの塀がある小学校が厳めしく格好が良かった。明治39年（1906年）創立のこの学校は、町の名前が市ヶ谷山伏町と言われたり牛込山伏町と言われたりしてきた歴史の中で、一貫して市ヶ谷小学校であり続けている。夏目漱石が生まれたのはこの界隈らしい。山伏が多く居住していたことから地名になったと言われている。裏通りに入ると職人や役人が住んでいたことを意味する地名が沢山ある。

### 牛込北町【うしごめきたまち】

山伏町を出て暫くして牛込郵便局前を通り過ぎると、小さなカーブを曲がりわずかな下り坂に入り、牛込北町。電車通りを横切る市ヶ谷から来る通りには商店街が並び、肉屋、花屋、薬屋、和菓子屋などなど下町の風情があった。交差点から順に、筆筒町、細工町、納戸町、払方町など昔の様子が想像できるような名前の町が連なるのもうれしい。交差点を逆に左に入ると、お寺の多い横寺町、矢来町。閑静な住宅地の間に旺文社、新潮社を筆頭に出版関係の会社や印刷工場があったり、一風変わった町だった。こういう町の名をきちんと残しておいて欲しいものだ。

### 神楽坂（肴町）【かぐらざか】

祭の御輿がこの坂を上がれなかったが、お神楽で囃し立てたら上ることができたことから神楽坂の名がついたという言い伝えがある。

江戸城外堀から上る神楽坂の中段に位置する。地下鉄東西線の神楽坂駅は、坂の頂上よりもっと先の矢来町にあり、大江戸線の牛込神楽坂駅はずっと手前の筆筒町にあり、いずれも「神楽坂」という名はあまりピンと来ない。都電の停留所があった場所は坂の中段よりやや上で、今は「神楽坂上交差点」言われている。江戸時代の地図を見ると肴町（さかなまち）と記されているので、魚屋が沢山あったに違いない。毘沙門天と裏通りの花街、それを取り巻くにぎやかな商店街の並ぶ坂で、独特の雰囲気を持っていたが、歌舞伎町とちがって子供が歩いても危なくはなかった。

坂の下は外堀の神楽河岸を挟んで牛込見附（牛込御門）。佳作座・クララ劇場の二軒の映画館があり、よく映画を見に行った。

### 筑土八幡前【つくどはちまんまえ】

神楽坂を過ぎると突然静かになってしまい、少しずつ下りながら小さなカーブを曲がると筑土八幡前に着くが、あまりお客の乗り降りのない停留所だった。名前のとおり、電車道からちょっと入った所に筑土八幡神社があった。西暦800年代に創建された古い神社で太田道灌の別邸があったことから付近一帯を御殿山とも言ったらしい。

### 飯田橋【いいだばし】

五差路という大きな交差点で、13番のほかに15番（高田馬場・茅場町間）と始発の3番（飯田橋・品川間）が走っていた。複雑な道路事情と交通信号とで混雑が絶えない交差点だった。

交差点を横切る時、右手に始発の品川行が止まっているのを見やると、見上げる高さを中央線が走り、また右にも左にも15番の表示をつけた電車が信号待ちをしている。飯田橋ならではの光景だった。天正18年（1590年）に、まだ農村地帯だったこの辺りを徳川家康に案内したのは、この地の長老飯田喜兵衛。家康はこの労に答えてこの町に飯田町と命名した。明治14年（1881年）に外濠を跨ぐ新たな橋が架けられて、飯田橋と名付けた。

### 小石川橋【こいしかわばし】

右手に神田川を眺めながら中央線と平行して走る。この辺りの地名「市兵衛河岸」と聞けば察しがつくとおり、古くより水運を利した業者が活躍した。中学校の同級生の家（材木屋）もあった。

左手は「飯田橋職安」、いつも外に行列ができていた。その奥には鬱蒼と茂る小石川植物園。

やがて到着する小石川橋は後楽園の入口で、人の乗り降りが多かった。

### 水道橋【すいどうばし】

飯田橋同様に大きな交差点。左に講道館、右に中央線の高架、走る前方に特徴ある都立工芸高校。

16番・17番・35番など、かなりの路線が通過するところで、沿線に学校がある路線が多いので乗り



換えるお客さんは多かった。

13番は、白山方面から神保町方面へ向かう軌道を車体を揺らしながら横切り、中央線の線路を右手に見ながら、ゆるやかな上り坂に入る。これまでは車窓の右側のやや見上げる高さを走っていた中央線が、見下ろす視界になっていき、間に挟まる神田川の水面を引き連れて味のある景色だった。

### **本郷元町【ほんごうもとまち】**

坂を上るにつれて右手の景観は変わっていく。現在の国土地理院の地形図で確認すると、水道橋交差点は海拔6m、順天堂大学の前まで来ると18mを越える。御茶ノ水駅の南側は19m余ある。神田川の水面はほぼ海拔0mなので、山と谷を見るような感じになる。

深い水路を挟んで崖の下のような所を走る中央線、鉄道好きな人が写真を撮りたくなる所だった。

上り坂の最高点に達した辺りに本郷元町の停留所があり、目の前に順天堂大学があった。

### **御茶ノ水【おちゃのみず】**

神田川と中央線を右手に見ながら走ると、ほどなくして御茶ノ水の停留所になる。御茶ノ水橋の袂にあり、国電に乗り換える人が橋の上を小走りに駆ける姿が見えた。

御茶ノ水橋は明治24年(1891年)に完成した。日本人が設計した初の鉄の橋だったが、関東大震災で被害を受けて昭和6年に再架橋された。

中央線御茶ノ水駅のホームからは神田川の堀割が見られ、都電からは谷間を走る中央線が見られる。どちら側から見ても景色が楽しめた。

御茶ノ水駅にあるもうひとつの橋が聖橋。鉄筋コンクリートのアーチ型の橋で関東大震災の復興事業として昭和2年(1927年)にできた橋。江戸時代の地図を見ると水道橋にある二つの橋の次は昌平橋まで橋がない。湯島聖堂とニコライ聖堂を結ぶ橋としてこの名になった。中央線や総武線に乗り換えたり、神田の古本屋街へ出かけたものだが、目的地に応じてどちらの橋を渡る方が近いかを考えるのも楽しみのひとつだった。

アーチ型の聖橋の下に神田川の流れ、その先に地下鉄丸ノ内線が谷を渡るために真っ赤な車体で一瞬だけ地上に出てくる。神田川の岸の崖下を走る国電も合わせて絶好のシャッターポイントだった。

### **松住町【まつずみちょう】**

御茶ノ水で殆どの乗客が降りてしまい、残っているのは万世橋で乗り換えようとするお客さんばかりになる。海拔3mほどまで下って昌平橋をくぐり、松住町。静寂な町で、ここで乗り降りする人の姿はあまり見たことがなかった。秋葉原駅で山手線を跨ぐために高度を上げて行く総武線と、海拔16mの本郷台地から下って水面に近づいていく都電13番、これもまた迫力のある景色だった。

江戸時代の初頭には長福寺という寺があったが、明暦の大火(1657年)で焼失し、寺は浅草で再興され、寺の跡地は町人が暮らす町屋に変わった。復興後は神田川の水運を利用した材木商やその関連の商売が主流の町になり、「薪河岸」とも言われた。

### **万世橋【まんせいばし】**

終点の万世橋に到着。上野方面と日本橋、銀座方面をつなぐ幹線の停留所で、電車の往来も随分多い。右手上に中央線の旧万世橋駅跡とその裏側に交通博物館、左手上に総武線のひとときわ高い高架。視線を上下左右に振らなければならない景観だった。

江戸時代には昌平橋のやや下流に筋違橋(すじかいばし)があり、筋違見附(筋違御門)があった。橋は明治に入って下流に架け替えられて、府知事の命名により萬世橋(よろずよばし)となったが、市民の「音読み」に凱歌が上がる結果となった。

秋葉原へラジオの部品を買いに行く時には、交差点を左に曲がり次の停留所(秋葉原)まで歩いた。

以上

- ◆参照資料
- |             |               |
|-------------|---------------|
| 江東古写真館      | (発行：江東区教育委員会) |
| 東京時代MAP大江戸編 | (発行：光村推古書院)   |
| 東京の地名由来辞典   | (発行：東京堂出版)    |